

文：岡本 悠

カフェテリアな女

思えば

カフェテリアには

よく

通ったものだ

ケイちゃんは

吉瀬美智子のような

マイ・リトル・ラバーのアッコのような顔で

清楚に

ターバンを巻いて働いている

俺は

いつの頃からか

意識するようになった

視線が合えば

にらめっこ

にはならず

向こうが

すぐに

外した

度胸試しに

ザ・ビートルズの

ヘイ・ジュード

を

聴いて

客として

向かった

最初は

本を持っていった

アイスコーヒーを

注文した

夏場だったから

ケイちゃんは

年上の

おばさんの店員を

厳しく

注意していた

そろそろ帰ろうかと思ったら

俺の左に座って

飯を食べた

俺は、本を読み続けたが

ケイちゃんは

スマホや

飯を食うと

また、去っていった

図書館に行くと

甲高い声が響いた

シャトルが

打ちあがると

雲が

割れた

ケイちゃんは

10年以上も前から

ここで

働いていたのではないか？

そんな

かすかな記憶が

あった

その10年以上を

俺は

働いて

過ごしていた

もう

最近は

図書館に

カフェテリアに

行かなくなった

ケイちゃんと

最後に会った日

俺は

ケイちゃんの

視線をとらえた

俺は

ヘイ・ジュード

を

聴いていた

ジョン・レノンが

息子に

作った曲だと知ったのは最近だ

愛の告白なんて

できるわけがなかった

真昼間の

カフェテリアで

どうやって

告白するんだ

イングリッシュマン・イン・ニューヨークでは

カフェテリアと

描かれた

映像があった

2回目の時

俺は

本を読まなかった

だから

ケイちゃんばかりを

ジーンと

見ていた

誰かが

俺のほうを

ずっと

見ていた

きっと

俺の

知り合いだろう

ケイちゃんの前で

アイスコーヒーを

飲んだのは

この時が

最後だ

その後は

一緒に

会えるチャンスは

なかった

なぜ

愛は

消えたかというと

もう

神が

ケイちゃんを

諦めさせたからだ

「カフェテリアのケイちゃん」という歌が流れた

ヒュルリーラ、ヒュルリーラ

記憶の中で

愛しきることは

できなかった



ケイちゃんとは

なんなのかという

微笑みの

女神だった

俺に

嫌な顔ひとつしないで

でも

最初の時、

まず、場所を決めてくださいと言った

アンバランスな

女性だけど

素敵なおことがあった

ある日

カフェテリアの中を

覗いていたら

ケイちゃんが

働いていた

フレンチトーストを

作っていた

愛は

静かに鳴った

「この近くで働いているのですよ」

その仕事場は

辞めたが

ケイちゃんだけは

このカフェテリアの仕事を

辞めていなかった

じゃあ、好きではないけど

こう言うよ

ブレイク・ファースト、アイ・ラブ・ユー、また、どこかで会う日まで... サヨナラ！

「完」